
幽玄回廊

零/Rey

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽玄回廊

【Nコード】

N0637X

【作者名】

零/R e y

【あらすじ】

エミグレ文書を使ってアリスを復活させようとした後、悪夢に悩まされるウル。彼は悪夢を見ないために睡眠を拒否するという手段を取る。日に日に弱っていく彼を心配した仲間たちは彼を強制的に眠らせたのはいいが…

過去にコピー本出だしたものの再録です。

壱章 禁忌

ウェールズのはずれにある崖の先端に、かつて政治的策略によって敗れた罪のない者達を一生投獄しておく呪われた修道院の跡地があった。怨念漂うその場所は、忌み嫌われる場所としてだれも住もうとはしないところであるにもかかわらず、一人の老人が住居を構えていた。その老人は、ヴァチカンの秘術を自らに使い不死となった魔術師で無限となった自分の時間を有効に使って多種多様の研究をしてきていた。そんな世捨て人のような老人と異能の力を持った青年が知り合ったきっかけは、ヴァチカンの禁術書を悪用しようとした人間を止めるためだった。それからというもの、彼にとって老人は知識を教えてくれるよき師であり、仲間でもあった。

それから半年が経ち、彼等が再会したとき、青年は、前の戦いの仲間であり、彼女であった女性を亡くし、自らも二度と解くことが出来ない、という呪いをかけられていた。老人はそんな彼に自らが作った飛行船を貸し与えたり、年齢を重ねた者としていろいろなアドバイスをしていた。

その老人が、青年にある一言を囁いた。

――亡くなった彼女をよみがえらせる気はないか、と

青年は世の中の理を外れた事を言う老人の言葉に、何故か普通に信じようと言う気分になったのか、今度の戦いで得た仲間達とウェールズに飛び、老人に促されるがままに彼の家の地下にある一室に入ってしまった。

常人には理解不可能な機械が山と積んである部屋の一角に、彼は老人に指示されたとおり、先日エリザベス女王ゆかりの聖地で取ってきた月晶石をまるで壊れ物を扱うかのように慎重に置いた。そして、ゆつくりと視線を動かし、石の上にある透明な液体の入った培養タンクのような物を見つめた。ポコポコと細かな泡が立っているその物体をじっと見つめる彼の表情が薄暗い部屋を反映してか、ガ

ラス面がまるで鏡のようになって映し出されていた。その表情は、普段のある意味投げやりとも言えるやる気なさげなものとは一転して、真剣そのものでだれも寄せ付けない、と言わんばかりの空気を纏っていた。元々通常の人なら持ち得ない異能者故の彼の真紅の両目がより一層その雰囲気の際だたせていた。

「まだ何もしていないうちからそんなに気を張りつめてどうするんですか、ウル」

その場の緊張感とは全く正反対とも言えるのほほんとした老人の声に、ウルと呼ばれた青年は弾かれたように振り向いた。まるでミイラのようにひからびた風貌を持っているのにも関わらず目だけは少年のように輝いている老人はひょこひょこことウルのそばに近寄ると、彼の背中を安心させるような感じでぼんぼんと叩いて言った。

「大丈夫ですよ、加藤特佐が亡くなった思い人の復活を成功させているんです。貴方の思いはそれ以上なんでしょう？」

「…ああ」

控えめながらも力強く頷くウルの言葉に満足したように老人は、いくつかの機械を作動させていた。そして彼は、ウルがいる場所に歩いて彼の目の前に手を差し出した。

「アリスさんのDNA、つまり彼女の身体の一部は持ってないですか？」

その言葉に促されるように、ウルはウエストバックに手を掛けた。大事に包まれた紙の中からは幾筋かの銀髪が乗っていた。老人はピセンセットで慎重に銀髪を一筋取ると、それを培養器の中に入れた。老人のしまつて良い、と言うジェスチャーに従うようにウルは手の上にあつた銀髪を大事そうに紙に包み、ウエストバッグにしまった。培養器のおいてある場所から移動して、再びいろいろなランプが点滅する機械を操作する老人の背中にウルは不安混じりの声で問いかけた。

「なあ…本当に…大丈夫、なのか？禁断の秘術、だろ？」

その声に老人はくるりとウルの方を振り向くと、自分の胸に手を

当てていった。

「私を誰だと思っているのです？ ロジャー・ベークンですよ。エミグレ文書を転記したのはこの私、と言うことは、一番この文書の中身を把握しているのもこの私にしか他なりません」

ロジャーと名乗った老人は、そうきっぱりと言い切ると、再び機械を操作し始めた。月晶石の光を乱反射して七色に淡く輝きながら泡が立ちこめる水槽を見つめるウルは自分の左胸に手を当てて言い聞かせるように心の中でつぶやいた。

――大丈夫だ、加藤は川島中佐を桜花と言う形で蘇らせたではないか…アリスだつてきつと…

「では、始めましょうか」

ウルのを思考をうち破るようにロジャーが声を掛けてきた。ウルは、心の準備が出来た、と言わんばかりに縦に頷いた。

「上手くいけばアリスさんは、亡くなった直前の記憶のまま復活します。彼女の感覚としたら永い眠りから覚めた、という状態でしょう」

ロジャーそう説明すると、普段のお茶目な表情とはほど遠い、稀代の魔術師、と言われるのが納得できるような真剣な眼差しを水槽に向け、両手を前にかかげるとゆっくりと呪文を唱えだした。

「ソレミウス…ソレミウス…ソレミウス…」

その言葉に応じるように月晶石は淡く青白い光を放ちだした。水槽の中は細かい泡が多量に発生し、その泡が徐々に寄り集まりだして形を作りつつあった。その動きを助ける、と言わんばかりに月晶石の輝きが微妙に変わりだし、それに呼応して泡は人型をかたどった。

「…！！」

人型をした泡が徐々にはじけていくたびに、銀色の揺れる髪が現れだしてきた。そして、現れつつあるのは、髪の毛だけではなかった。目を堅く閉じた女性の姿、すなわち、亡くなったアリス・エリオットの姿が徐々に形作られていきつつあった。

一度形が現れ出すと、彼女の造形を作り出す勢いはますます加速し、首、肩、胸、と形があらわになりつつあった。

……本当にアリスは黄泉返るのか……しかし……

ウルの内心にわずかな不安が影を落とした。その瞬間、彼の不安に呼応したかのようにピシッ、と言う音が部屋に響いた。

「…月晶石にヒビが…」

ロジャーがつぶやいた途端、一筋のヒビがだんだん大きくなり、石に深く亀裂を作っていた。そして、最後には、パシッ、という音と共に石は粉々になって崩れ落ちた。

「アリスっ！」

ウルの視線の先には、再生途中で止まったままの最愛の女性の姿があった。再生を助けた源であった月晶石が砕け散ったことで、彼女の身体はゆっくりと崩壊し始めていた。その上、死の匂いに釣られたのか、自分では姿形を取ることは出来ない低俗な怨霊とも言えるモノ達がアリスの身体めがけて群がり出しつつあった。

「消えろっ！」

彼女の身体を誰にも触れさせたくないと言う思いからウルは気迫をアリスにたかろうとするモノ達に飛ばした。その瞬間、悪霊達を従え胎内に封じ込めるハーモニークサーの性質故か、ウルの気迫におそれをなしたのか、それらのモノは一瞬にして霧散した。しかし、アリスの身体は彼女にたかっているモノを吹き飛ばしても、崩壊が止まることがなかった。ウルの脳裏に、半年前に味わった恐怖と後悔がよぎった。自分と一緒に居た人間が気がついたら冷たくなり、それが自分自身が原因だったという事が失ってから初めて判明し、ずっと後悔してきていた。その後悔の経験が全く役に立っていない、そして、自分は何も出来ないと言う無力感にウルの目の前が暗くなりかけた。

「ウル……」

不意に聞こえた優しい声に、ウルは慌てて水槽の中のアリスを見つめた。この声は絶対忘れることのない、もう一度是非聞きたかつ

た彼女の声だった。身体は徐々に崩壊していきつつあるにもかかわらず、彼女の表情は、ほほえみの形でうつすらと目を開け、まるで慈悲深い聖女のようにだった。

「ア…リ…ス…」

彼女の目が開き、口がゆっくりと動かされたことに、ウルは信じられない、と言わんばかりに目を見開いてじっと彼女を見つめるだけだった。そんな彼女に対して、アリスは穏やかな笑みを崩すことなく、再び声を発した。今度は、ウルにはっきり判ってもらえるように、と言わんばかりにゆっくりと。

「ウル…愛しているわ…」

その瞬間、ウルの両目から本人が意識してないうちに一筋、二筋と涙がこぼれ落ちていた。自分のせいで命を落とすことになったのに、こんなふがない自分に対して『愛している』と言ってくれる彼女の懐の大きさと、どうして彼女が生きているときにウル自身が抱いていた思いをちゃんと彼女に伝えられなかったのか、と言う自分への大きな後悔が涙となって現れていた。ウルは涙目のまま、彼女の言葉にはっきりとした口調で返した。

俺も…と

その答えがアリスの耳に届いたのか、彼女はふわりと微笑み、その笑みのまま泡となって消え去った。その瞬間、ウルはがっくりと膝をつき、彼女が消え去った後の何も残っていない水槽を茫然自失で見つめているだけだった。彼の背後でロジャーが奇跡が起こった、とはしゃいでいるのさえ彼の耳には全く入ってこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637x/>

幽玄回廊

2011年9月26日02時59分発行